

# 社会学分野における不登校研究の動向

## Trends in School Refusal Research in the Field of Sociology

吉 田 有 希

### 要 旨

不登校の児童・生徒の数は年々増加傾向にあり、大きな社会問題のひとつとなっている。教育学や心理学、福祉や精神医学分野における不登校研究は数多くみられるが、社会学の視点から考察された不登校研究は、あまり蓄積がなされていない。そこで、今日までに国内の社会学分野において不登校がどのように研究されてきたのかを、①社会学分野における不登校の捉えられ方、②不登校当事者からの視点、③不登校当事者の周辺人物からの視点、の3つのカテゴリにわけて整理した。そのうえで、今後社会学分野でどのような不登校研究が求められていくのかを考察していく。

キーワード：不登校問題、不登校当事者、社会意識

### 1. はじめに

不登校とは、「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により登校しない、あるいはしたくてもできない状況にあるため、年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的理由による者を除いた者」を指す<sup>1)</sup>。文部科学省がおこなった2018年度の調査によると、不登校の小中学生は164,528人いるとされており、その数は6年連続で増加している<sup>2)</sup>。このような状況を踏まえ、2017年2月には、不登校の子どもに対して学校への登校を強制せず、それぞれに合った学習機会を保障することを目的とした「教育機会確保法」という法律が施行された。さらに近年は、TV番組や新聞などで不登校が取り上げられることも増えており、今や不登校問題ははじめ問題とともに大きな社会問題のひとつとして捉えられている。

不登校問題は社会問題である以前に教育問題

であり、子どものメンタル面の問題（心の問題）であると見なされがちである。また、「不登校は病気であり、治療の対象とすべき現象だ」と考える研究者も多い。そのため、教育学や心理学分野、社会福祉分野や精神医学分野での不登校研究は数多く見られる。しかし、社会学分野における不登校研究は、まだそれほど蓄積がなされていない。

本論では、現在までに蓄積されている社会学分野における国内の不登校研究を、3つのカテゴリに分けて整理する。そして、今後どのような不登校研究が社会学分野において求められていくのかを考察し、不登校問題の解決の一端を見出したい。

### 2. 社会学分野における不登校の捉えられ方

はじめに、不登校問題が社会学分野においてどのように捉えられているのかを簡単に整理し

たい。

森田洋司(2005)が1988年度に中学生を対象におこなった調査によると、「なんらかの理由で学校へ行くのが嫌になったことがある」生徒は全体の約70%もいることがわかった。この結果について森田は、「不登校による欠席や遅刻・早退などの行動は、こうした生徒の日常生活の中で形成される登校への回避感情を背景として現実化されたものである」(森田2005:26)と指摘している。つまり、学校を欠席や遅刻、早退している子どもたちは皆「登校回避」という感情を共有した世界にいることはたしかであり、「欠席と出席の行動の差は、付加される条件の差にすぎない」(同書:27)。そのため、「出席していようが欠席、遅刻・早退していようが、感情面ではすべて不登校」(同書:27)であると考えることができる。このように、たとえ欠席行動を取らなくとも「登校回避感情」を有しながら登校および遅刻・早退をしているという、不登校の各種統計には表れてこない実態部分を森田は「不登校のグレーゾーン」と定義づけている。そのうえで、もはや不登校が一部の子どもたちに起こる現象ではなくなってきていること、そして、不登校問題は学校教育の中だけにとどまるものではなく、社会全体の問題として再検討していく必要があることを強く主張している。

また、樋田大二郎(2001)は、塾や習い事などの学校外学習機会利用者の増加に伴う学習機会の多様化が、不登校増加に影響を与えているのではないかと指摘している。さらに今後、学習塾利用者が増加し、学習塾のニーズが高まれば、「進学塾通学者による通学放棄としての“不登校”がやがて出現するかもしれない」(樋田2001:34)とも述べており、「不登校は、多数ある選択肢の中で登校が選択されずに他のことが選択されただけ」(同書:36)にすぎないのではないかと述べている。そのようにして、今後ますます学校外の場所で学習を行う子どもが

増えれば、彼らのようなケースが不登校の大多数を占める可能性もある。もしそのような事態に陥った場合、樋田は「もはや不登校は一斉指導の必然的病理とみなすことはできない」(同書:38)と主張している。

### 3. 不登校当事者の苦悩や葛藤

不登校問題を語る上で、不登校当事者の視点から研究された知見は欠かせない。そこでまず挙げられるのが、貴戸理恵の研究(2004)である。

貴戸は、不登校には2つの物語があると述べている。ひとつは「子どもは学校に行くべきであり、周囲の大人は不登校者を学校に戻すために手を尽くすべき」(貴戸2004a:12)と考え、不登校を克服や治療の対象とする物語で、もうひとつは「子どもは学校に行かなくてもよいのであり、学校の他にフリースクールなどの選択肢を認めるべき」(同書:12)と考える物語だ。不登校を「克服や治療の対象」と考える専門家や教育関係者によって形作られた前者の物語に対し、1980年代半ばに「不登校の親の会」の参加者やフリースクールなどの居場所関係者たちによって形作られた後者の物語は、不登校を「人生の選択肢のひとつ」として肯定し、不登校当事者やその親たちの不安や悩みを解消することを目指している。この後者の物語の創出によって、「不登校のままでも良いのだ」と自身の不登校経験をプラスに受け止める不登校当事者が増え始め、そのような当事者たちが表に出て自身の経験や思いを語ることで、徐々に「明るい不登校」のイメージが世間に広まっていった。

しかし貴戸は、現実はそのような「明るい不登校」経験を持つ当事者ばかりではないことを指摘している。貴戸がインタビューをおこなった不登校の元当事者は、次のように語る。

「元登校拒否児の中でマトモな社会人になってる人が、一体どれくらいいるってい

うんだろう。ひきこもり、病気、暴力といった『ハッピーエンド』とは程遠い状態にある人も少なくないはずだ。……こうした人たちは、すっかり忘れられてしまったんだろうか？それとも、『見せたくない』とハブかれてしまったんだろうか？もしそうだとすると、疑問がわいてくる。『明るい登校拒否』の物語は、本当に登校拒否を肯定するようなものだったのか？」（同書：21）

このように、「明るい不登校」の物語は当事者やその親たちの不安を取り除き、希望を見出す役割を担っている一方で、当事者の多様性を隠蔽し、一部の当事者たちを「いなかったことに」してしまう危険性を持ち合わせている。

さらに貴戸は「不登校当事者のその後」について、このように指摘している。

「〈当事者〉にとって『社会に出る』ことは、不登校の『終わり』を意味しない。就職や就学は、あくまでも不登校と連続してその先に存在しており、彼ら・彼女らは、不登校経験を持つゆえの、新たな葛藤や緊張に身をさらすことになる。そこででもっともリアルに迫ってくるのは、不登校の『克服』などではなく、不登校経験の開示・秘匿や価値観のすり合わせといった日常生活の問題なのである。（貴戸2004b：206）

一般的に「不登校のその後」というと、「どこかに就職や就学をすること」と考えられており、そこに進むことができれば「不登校は“終わった”」のだと認識される。しかし、「不登校経験を持つ者」ならではの葛藤や苦悩というのは、不登校が「終わった」あともずっと続いていくのである。

また、森田(2001)も「不登校当事者のその後」に焦点を当てた研究をおこなっている。森田は中学3年生時点で不登校だった当事者たちを対

象に、中学卒業後から約5年間の進路を追跡するという大規模な調査をおこなった。調査の結果、中学卒業後の進路先で、自分自身の不登校経験を受け入れてくれる人や場所と出会った場合は比較的安定した進路を辿ることができ、不登校に伴う「心の問題」も解決に向かって「正の連鎖」が続いていくことがわかった。その一方で、進路の問題がうまく解決しない場合は「心の問題」を増幅させることになりかねず、「負の連鎖」が続いていくこともわかった。この結果について森田は、次のように述べている。

「『不登校問題』を問題たらしめている大きな要素の一つは、従来指摘されてきたような『心の問題』（心的な安定をめぐる問題）でもあるが、それと同時に『進路の問題』（進路形成、進路実現にかかわる問題）でもある。（中略）不登校であったこと、すなわち別な言い方をすれば、『重たる教育ルートをはずれた』ことは、進路のみならず就職に関しても大きな影響を及ぼしうることで、そして不登校に伴う『心の問題』が深刻になるかどうかは、この『進路の問題』がうまくクリアされるかどうかと大きく関わっている。」（森田2001：2）

このように、不登校当事者にとっての「不登校の“その後”」というものは、決して単純なものではなく、「重たる教育ルートをはずれた」代償というのは、我々の想像以上に大きいものであると考えることができる。

#### 4. 当事者周辺人物から見た不登校

では、不登校当事者の周辺にいる人物は、不登校をどのように捉えているのだろうか。松本訓枝（2003・2005）は、不登校の子どもを持つ「親の会」に参加する父親と母親を対象におこなったインタビュー調査から、当事者の親の苦

悩や葛藤についてまとめている。

それによると、子どもが不登校になった場合、父親は「子どもが不登校であることは、近所や会社に恥ずかしくて言えない」や「家族集団をうまく統制することができない」という意識から、自分自身が否定されたように感じる傾向にあることが述べられている。その一方で母親は、「自分の子どもが不登校になったのは、自分の子育ての方法が間違っていたことが原因だ」と思い、「母親役割をうまく遂行できない」という意識から自分を責める傾向にあると指摘している。松本はこの現象について、「性別役割観、子ども中心主義を特徴とする近代家族の生成と絡み合いながら構成されている」（松本2003：71）ものであり、「『不登校』とは子どもの問題であることのみならず、（中略）夫婦の関係性が問われる問題である」（松本2005：37）と主張している。

また松本は、学校教師や保育士などの教育関係に関わる仕事をしている親の場合、「子どもを指導していく立場である自身と、わが子を『不登校』にしてしまった自身との間で苦悩を強いられる」（松本2003：34）ことになるという「職業役割」に関する親の苦悩についても指摘している。このように、不登校当事者の父親と母親を取り巻く苦悩や葛藤は、近代社会の特徴である性別役割分業や、職業役割に基づく葛藤などの影響を直に受けているのである。

一方、不登校当事者周辺にいる子どもの視点からだとどうか。櫻井裕子（2011）は、「学校に登校している中学生が、不登校中の生徒のことをどのように捉えているのか」について、中学生が持つ「学校観」と合わせて考察している。

それによると、本当はあまり学校に行きたくないのに、親や先生に促されて登校していたり、「学校は行くべきところだ」という社会意識から登校している子どもは、不登校生徒に対して批判や羨望の気持ちを持つ傾向があることがわかった。また、友人や先生と比較的良好な関係

が築けており、学校に一定の魅力を感じている子どもは、「不登校生徒がなぜ学校に来ないのか、理由を知りたい」と疑問に思ったり、不登校生徒を心配したり、「早く学校に戻ってきてほしい」という思いをより強く抱く傾向があることもわかった。

櫻井の調査からは、「中学生に登校する理由」として極めて高い得点を獲得した項目は「友達と会えるから」であったことが明らかになっている。この結果について櫻井は、「友人との良好な人間関係は、『学校』について考えるうえでとても重要で当然のことだ、ということを示している」（櫻井2011：191）と主張している。また、森田（2005）が元不登校当事者を対象におこなった調査の因子分析の結果からも、不登校に陥った理由として一番説明力が高い因子は「友人関係」であったことが明らかになっている。これらのことから、学校社会に属する中学生の子どもたちにとって、友人との良好な関係は登校事情に非常に大きな影響を与えていると言える。

## 5. 結 び

以上、社会学分野における不登校の捉えられ方の研究、不登校当事者およびその周辺人物から見た不登校現象の研究についてまとめた。

不登校は誰にでも起こりうる現象であり、社会全体の問題として広く考えていくべき課題である。しかし、「学校は当たり前に行くべきところであり、不登校になることは“普通”の状態ではない」という社会意識はまだ根強く残っている。そのような社会意識によって、当事者の子どもやその親は必要以上の悩みや苦しみを抱え込むことになり、不登校問題をより厄介なものにしてしまっているのだろう。

冒頭で述べたように、社会学分野における不登校研究はあまり多くはなく、発展途上の段階にある。それは言い換えれば、世の中の様々な



現象を批判的に捉える社会学を専門にしている研究者でさえ、「不登校=解決すべきもの」「学校に行くことは当たり前のことだ」というような、日本国内に蔓延している社会意識をあまり疑ってこなかったことの裏返しであるとも言えるのかもしれない。しかし、「教育機会確保法」を見てもわかるように、昨今の不登校問題への対応は「再登校を目指すもの」から「無理に登校を促さず、一人ひとりに合った学びを優先するもの」に変化しつつある。このような時代の変化のなかで不登校研究に求められてくるのはやはり、従来の価値観や考え方を批判的に捉え、新たな知見を見出す社会的な視点ではないだろうか。今後はこれまでの研究を参考にしながら、少しでも不登校問題が良い方向に進むよう、そして当事者やその周辺にいる人びとの悩みや苦しみが少しでも軽減されるよう、社会的な視点を大切にしながら不登校研究に貢献していきたい。

## 注

- 1) 文部科学省, 2018, 「不登校児童生徒への支援に関する最終報告」, 文部科学省ホームページ, (2020年11月27日アクセス, [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/08/01/1374856\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/08/01/1374856_2.pdf)).
- 2) 文部科学省, 2019, 「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」, (2020年11月27日アクセ

ス, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/31/10/1422020.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/10/1422020.htm)).

## 引用・参考文献

- 樋田大二郎 2001 「不登校現象からみる学校教育の変容——登校自明性の低下とパノプティコンの拡大——」『教育社会学研究』第68号 p.25-43
- 貴戸理恵 2004a 「『〈当事者〉の語り』の意義と課題——不登校経験の言語化をめぐる——」『相関社会科学』第14号 pp.18-38
- 2004b 『不登校は終わらない「選択」の物語から〈当事者〉の語りへ』新曜社
- 松本訓枝 2003 「『母親が語る『不登校』問題と対処——『親の会』における学習と相互作用過程——」『市大社会学』第4号 pp.63-80
- 2005 「『父親が語る『不登校』問題——親の会に参加する父親を対象にして——」『市大社会学』第6号 pp.29-44
- 森田洋司 2001 「社会学 不登校生徒の性別にみる進路形成の特徴」『人文研究』第53号 pp.1-22
- 2003 『不登校—その後—不登校経験者が語る心理と行動の軌跡』教育開発研究所
- 2005 『「不登校」現象の社会学』学文社
- 櫻井裕子 2011 「中学生が考える『学校』と『不登校』に対するイメージ』について」『奈良女子大学社会学論集』第18号 pp.181-196

(よしだ ゆき

佛教大学大学院社会学専攻修士)